

PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1999年9月 No.107

胎児を守る運動

老人の生命の尊厳

新しい生命の成長は美しい。新緑の季節が教えるように、まぶしい程である。自然に生き生きと映え出でる。芽が自然に伸びていくにつれて、「お目出とう」という挨拶を掛け合いたくもなる。一つの小さい命であるが、大きな未来を保持している。幼い命は実に、地上の「お恵み」なのである。この命が疎かにされ、その自然の成長さえ危ぶまれつつある今日、わたしたちは何よりもまず、命の擁護のため立ち上がらなければならない。

壮年期の命も力強い。新しいことを思い、実現していくのである。困難のように見えることも、この可能性の中に入る。思う一念が無より有を存在させるのだ。何か新しいことを実現することこそ、この年代の喜びなのである。この年代を自覚し、それを効率よく用いると共に、その働きに場所を与えるよう、社会も配慮しなければならぬ。

ところで、老年期はどうだろう。そこには静けさがある。落ち着きがある。老年になって走り続ける者はいない。だけど、そこには一つの地力がある。そこには賢さがある。無鉄砲さ乗り越えた永續性

がある。近頃、「老人力」と呼ばれる様になった。本当に昔からそうであった。昔から老人には特別の力があつたのだが、いま長寿社会と呼ばれるようになり、老人の数も多くなつたので、特別にそう感じられるのであろう。

老人の存在は意義深いものである。想へば、彼らは今日を造るために懸命に働いた。彼らは大きな恩人なのだ。いろいろな分野が違い、努力の度合も異なつたであろう。そしてその貢献度にも種々違いがある。だけど、あるとき一つの貢献をしたことは確かである。感謝の心で、評価し尊敬しなければならぬと思う。いま、彼らは生涯の最終の点にあり、本来、落ち着いた時を持ち、ゆとりの時を体験しているのである。

彼らは長い生涯の後、多くのことを見、聴きし、体験した。失敗と見えたことを通しても、貴重な体験を自分のものにしたのである。これを後世にいかにか活かすかを考えているであろう。わたしたちは先人に見習うところがなければならぬ。彼らの成功・失敗に学んで、よりよき世界を構築して行かなければならないのである。

彼らはまた、多くの賢さを学び取つたであろう。生命活動の熱気が冷めたいま、学んだことを反難していることだろう。これが人間の賢い財産となる。これを保存し、活用することこそ、将来の人の責任である。人間なるものは前進しなければならぬ。これを如何に活かすかは、過去の人と現代人の共同作業である。老人の持つ豊かさや落ち着きと賢さと、現代人の学ぶ心と実行力が、新しいより良い世代を築いて行くことであろう。その為にこそ、彼らの遺産は活用されねばならない。彼らは死んでしまつたわけではない。まだ生きていて何かできる。有力な人も少なくない。奉仕・貢献を考える人も沢山いる。彼らの経験と技術を活かすことも、福祉の一つである。老人と若者の協力が大切な時代の財産と言えるのである。明るい未来の創造は老人たちの願いである。

もう一つの老人の特徴は、死を前にしているということである。

新しい命との出会いを前にしているということである。命はどの時点でも神から愛されている。それ故に最後まで責い。しかし、自分の越し来た道を顧み、命なるものとのであいを思うことは、最も人間的と言える。彼の姿が人生の賢さを示すとも言える。人生の意義を

教え、人生に何かを付け加える老人期を、わたしたちは大切にすることを学ばなければならない。

しかし老人は弱い存在でもある。マタイ福音書 二五章三五節以降に、「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた・・・」とあるが、これは言葉のまま、老人にも当てはまる。老人たちも、食べさせる人、飲ませる人、必要とし、宿を貸す人、着せる人、必要とするのである。老人を大切にすることは、キリストの教えであり、天国への道なのである。

老人たちを宝とし、大切にすることを、わたしたちは学ばなければならない。命の尊さはどの時期にも特殊の美しさをもって輝くものである。

松永久次郎司教(福岡教区)



ママを愛するために

そよ風に髪をなびかせながら、私は車で国道を走っています。遠くに美しい花が咲いているのが見えます。

「ほら見て、ママ。あのバラきれいじゃない。」と私は興奮して指さします。

ママは前に身を乗り出して、何も言わずに窓の外を見ています。彼女は同意の音を発します。そして、彼女はゆっくりと私の方に顔を向けます。私は車を走らせながら、彼女がまだ詮索するように私をじっと見ているのに気づいています。

私は困惑して彼女をじっと見つめます。私は長い間家を離れていました。夫と私は四人の子どもと一緒にここ四年間、イタリアに住んでいたのです。ママは私達がいけない間に未亡人になっていました。私は気づいぶん変ったことだろうと思っていたのですが、それほどでもありませんでした。兄弟達からは前もって、ママが時々おかしくなると知らされてきました。

ついに、彼女がぎこちない沈黙を破って、「もう一度尋ねるけど、あなたが住んでいるのはど

くだったのかしら。」と言います。

私は微笑んで安堵のため息をつきます。その言葉は、多分彼女の口から出そうになっていたのだと思い、大きな声で私は「イタリアよ。」と答えます。

「あら、私にはイタリアに住んでいる娘がいるのよ。あなた彼女を知ってるかしら。」と満面に笑みを浮かべて言うのです。私はショックのあまり言葉も出ません。「あなた彼女を知ってるかしら。彼女の名前はシルビアというのよ。」と言うのです。私の舌はこわばって返事をするのができません。ママは同じ質問を繰り返すのです。

私は声を落着かせて、「私がシルビアなのよ。ママ。私があなたの娘なのよ。」と言います。彼女は大きく目を見開いて、すぐ自分の世界から現実を引き戻されます。彼女は怯え、羞恥のあまり顔を歪め、悲しみに打ちひしがれるのです。

私はそのことを気にしないように努め、心の中で、「謝ることは何もないのよ。何も間違っていないのよ。そのことを心配しな

くてもいいのよ。」と言いながらも、家に帰るまでずっと私の心は涙で一杯なのです。

「ごめんなさい。自分の娘を忘れる母なんているかしら。一体どうしてこんなことになったのかしら。私の心がどうかしているんだわ。」とママは言います。

私の滞在中にママの状態が良くなることはありません。彼女がおかしくなる頻度が増すのです。そのことに彼女は怯え、頭がはつきりしている時に、彼女はもつと不幸になっていくのです。「私はもう何の価値もないわ。私はちゃんと考えることができないのよ。心を失った体なんて何の価値があるかしら。私が死ぬことがみんなにとって一番いいんだわ。」と言うのです。私は彼女に反論します。

彼女を私達は決して重荷にはなっていないと言うのですが、その言葉に確信はありません。私の思いは、心の痛みで混乱しているのです。私は裏切られたような気持ちになり、自分の感情と混乱に罪悪感を感じるので

ママの言うことが正しいのでしょうか。死ぬことが解決にな

るのでしょうか。彼女がいなくなると私達は幸せなのでしょいか。彼女の苦悩する心が私を飲み込み、私を憂鬱にさせます。母は今ではまるで他人です。彼女が私を見る時、その驚色の瞳の中には思い出が全く存在していません。かつて私の涙をふいて、私をだっこしてくれた人の面影はほとんど残っていません。

「私は何の価値があるのかしら。」という彼女の問いに対する答えは、彼女がだんだんとひどくなっていくのを見ていると、私の心の中に浮かんできません。「主よ、私に答えをお与え下さい。」と私は苦悩の言葉を発するのです。

その答えはまばゆいばかりの光の中から訪れるのではなく、ゆっくりと確実にやってくるのです。献身が混乱を征服するのです。

いくらかたつて、彼女が老人ホームのホールでひとり椅子に座っている時、私はゆっくりと今にも出そうになる涙をこらえながら、彼女に近づいていきます。彼女の目はほんやりと足元を見たままです。彼女が目を上げないので私がしゃがんで彼女と面と向かい合います。

「私はあなたが必要なのよ、ママ。私達はみんなあなたが必要なのよ。私達が愛情を注ぐことができるためにあなたが必要な

のよ。」と私は彼女のかほそい体をそっと抱き締めながら言うのです。

生涯を通してママは私達のために自分を捧げました。今は私達が無条件に、何の見返りも期待せずに愛する番なのです。私達にとつて、そして彼女の孫達にとつての彼女の価値は変わらないままなのです。彼女はいつも私達にとつて、神様の私達に対する変わらない愛を教えるものなのです。神様は今の母を私達にお与えになりました。そしてそれでも私達が、「ママ、愛しているわ。」と言うことができるたびに、神様に感謝しながら、私達は身を捧げ、その務めを受け入れるのです。

シルビア・シュルデー

回勅

「フマネマ・ヴィテ」のカムバック

二年前、テキサス州ダラスでの
ことです。産児制限に関して
チャールス・カラン神父とジャ
ネット・スミス教授の公開討論が
ありました。スミス教授は千二百
人の聴衆を見回し、彼女の支持者
が四十歳以下であるのに対し、カ
ラン神父の支持者は普通五十五歳
以上であるという年齢差に気づき
ました。

テキサス州アーヴィングのダラ
ス大学で哲学教授を務めるスミス
教授は、結婚に関するカトリック
教会の教えを大事にしています。
彼女によると「若い人たちは生来
ロマンチックで、自分たちが心か
ら受け入れることのできる理想を
探すものです。それに反し過去三
十年に渡って高年のカトリック信
者は産児制限が相対した問題では
なく、そのうちに教導職も気が変
わるだろう」ぐらいの受け取り方
をしていました。彼女は続けます。
「その間多くの中年のカトリック信
者は反体制が流行していた時代に
育ち、産児制限のように議論の多
い問題については教会の指導を受
け入れませんでした。元アメリカ
ン・カトリック大学神学教授カラ
ン神父もその中の一人です」。

その論議を呼んだ誕生から三十
年を経て、回勅『フマネ・ヴィテ』
も大人になり、もつと多くのカト
リック信者、特に若い人々から
支持されるようになりました。
教皇パウロ六世の回勅は美しく、
心を打つ文書ではありませんが、教
皇と司教たちはその発布直後の数
年間、多くの信者にそれを読ませ、
そのメッセージを広めることには
成功しませんでした。多くの人々
はこれを地方と全国レベルの指導
者たちによる「沈黙による陰謀」と
さえ呼びますが、司教たちの沈黙
は、回勅の大事な教え、つまり産児
制限は結婚に属する夫婦間の絆と
産児に逆行するという教え、に反
対するとか無視する人たちがでて
くる結果を招きました。

さて、ヨハネ・パウロ二世の二十
年の在位の間、結婚と愛に関する
教会の教えをもつと多くの人々
が支持するようになりました。ス
ミス教授によると、教皇様がお書
きになった文書と世界を旅して、
若者に語りかける言葉で、「ヨハ
ネ・パウロ二世は若者たちの心を
つかみ、ムードが本当に変わって
きています」。

デトロイトのアダム・マイダ大

司教は、回勅『いのちの福音』で、
ヨハネ・パウロ二世が「わたしたち
の肉体またはそのいかなる機能で
あっても、わたしたちがそれを無
制限に支配できるわけではない」
というパウロ六世の洞察を繰り
返しておられることを指摘します。
さらに「夫婦の絆と産児の両側面
間にある不可分の関係を教えるこ
とによって、パウロ六世はわたし
たちが自分の体の主人ではなく、
神の計画に仕える者である」こと
を思い起こさせて下さいます。

夫婦の間にある性交は結婚の行
為と言われますが、アラルクで開
催されたイタリア全国大会でのヨ
ハネ・パウロ二世によると、それは
「人格が一つであり、分けることが
不可能なので、夫婦は互いに全て
を与え尽くすことしかできません」
。

わたしたちの社会は物質主義に
浸っています。人間でさえも何か
物であるかのような扱いをします。
このような雰囲気にあつて、結婚
行為の意味も曲げられてきた、と
教皇様は言われます。「人格は何か
の目的のために使用される手段で
はないことを強調する必要があります
です。特に、それは快樂のための手

段であつてはならないのです。人格
は全ての行為の目的でなければなり
ません。」教皇様はその大会に当て
た文書の中でこう言われています。

トマス・ヒルジャー博士による
と、回勅『フマネ・ヴィテ』は歴史
の転換点であり、「一九六〇年代初
期の避妊ピル受容、産児制限を禁止
する法律の廃止、英国聖公会および
その他のキリスト教諸派による産児
制限禁止の撤廃などにもかかわら
ず、カトリック教会は踏みとどま
りました。その教えを確認すること
によって、教会は結婚の保全、男女の
生来の尊厳、生命と愛を常に結びつ
けることへの力と意義のために敢然と
戦いました。そして生命と愛を分離
する者たちが避けることのできない
悲劇と暴力について警告なさいまし
た」。

ヒルジャー博士によれば、パウ
ロ六世の回勅は人間の性の意味を完
全に教済するものでした。その教え
が一貫した性の倫理としてまことに
そのとおりであると納得せざるを得
ません。回勅『フマネ・ヴィテ』が
なかつたら、中絶、避妊、不妊手術
に對抗する手段を欠いたことでしょ
うし、西欧文明に今日見られる性の
混乱を前にして施す手がなかつたこ
とでしょう。

ポナッチによれば「それが離婚の
直接原因ではないとしても、妻は自
分が利用されている、夫が要求する
ままに自分を提供しているという漠
然とした感情を持つものです」。回
勅『フマネ・ヴィテ』が発表された

ときポナッチは五歳でしたから、彼
女は教会の教えをもつと支持する
とスミス博士が考える若い世代に
属します。

パウロ六世は結婚した人たちの
避妊を、それが結婚の特徴である相
互授与に反するので「本質的に不正
直である」と言われました。

ヨハネ・パウロ二世が言われる
「体の神学」を考えると、「結婚し
た人たちの避妊は大声で、明瞭に
『妊娠を除いてなら、良きに付け悪
しきに付けあなたを受け入れる』と
叫んでいる」とわたしたちは理解し
ます。これはシンシナティのカプ
ル・トゥ・カプル・リーグのジョン・
F・キプリー氏の主張です。

「本質的に不正直である」という
表現は、キプリー氏によれば「避妊
の習慣に潜む自己欺瞞を暴露する」
助けになるかもしれません。現代、
多くの男女は自分たちの性欲が旺
盛であると考えることを好みます。
ですから結婚内での貞潔への呼び
かけは無駄に終わり、彼らをかたく
なします。しかし、自分たちが不
正直であると考えたがる人はおそ
らくいないでしょう」。

ウィリアム・マレー

「避妊」

説教師である司祭達への挑戦

ある女性が「神父様。先週の金曜日、教会に来てみたら、二人の母親が自分たちの使用している避妊法について話していたんですよ。あの人たちは毎週主日のミサに来ていますよ。子どもたちも教会の学校に出ているというのに。こんなことがしょっちゅうあるんですよ」。

なるほど、そんなことがしょっちゅうあるのかもしれない。ある調査によれば、カトリック信者の大部分は人工避妊を禁止する教会の教えに従っていないようです。一九六八年九月十一日、回勅『フマネ・ヴィテ』

発布から二週間も経ってないことです。それについて聞いたことのある人、もしくは読んだ人を対象に世論調査がありました。「この点に関してあなたは教皇に賛成ですか？それとも反対ですか？」調査対象になったカトリック信者の54%は教皇の立場に反対でした。それだけではありません。「避妊をしても良いカトリック信者であることができると思えますか？」と聞かれた人たちの65%は「そ

う思います」と答えました。一九九三年に同じこの同じ質問をされた人たちの82%が「そう思います」と答えています。

これらの反対者たちの気に入らなかった点は次の点でした。「しかし、教会はその常に変わらぬ教義で解釈する自然法を遵守するよう人々を促し、結婚の行為があるときには常に、人間の生命を生み出す自然の能力を害するようなことがあってはならない」。これは本質的には38年前の避妊の断罪に他なりません。

教皇ピオ十一世はもつと強い言葉で「生命を生み出す自然の力において意図的に損なわれるような結婚行為の行使は神の法にも自然の法にも反する。また、このような行為をする者は大罪を犯している」と宣言なさっていました。

これら司祭の教皇宣言に照らしみて、カトリック信者の間に広まった不従順は驚かされる。教皇パウロ六世が「結婚に関する教会の教えの全体を、包み隠すことなく教えるように」と彼らに訴えられたにもかかわら

ず、司祭たちは教皇を無視したのです。「もし聴罪司祭もしくは主任司祭が自分に託された信徒を少なくとも同意もしくは責任を問われる沈黙で、これらの過ちに導くなら、彼は自分が神の前で厳しく責任を問われることを忘れてはならない。目の見えない人が目の見えない人の道案内をすれば、両方とも穴に落ちるといふキリストの言葉を思い出しなさい」。彼らは教皇ピオ十一世のこの恐ろしい警告に顔を背けたのです。

避妊が女性を傷つけ、その原因にさえなっており、離婚の原因になり、しばしばそれには中絶促進作用があるという証拠があるにもかかわらず、調査に依じた司祭たちの75%はそれに賛成しています。これが霊的盲目でなくて何でしょうか？これらの司祭たちは教会の明白な教えを無視して、自分たちが無知であるまま、不妊手術、お気に入り

の避妊法、中絶促進剤を黙認し続けているのです。

避妊を認める司祭たちは自分に託された群を肉体的、道徳的

悪にだけでなく、永遠の滅びに導きます。自分たちの霊的盲目のために、彼らはローマ教皇庁が愛の心から繰り返し警告を無視しています。

「結婚に関する教会の全部の教え」を説くことは避妊の断罪を含みます。けれど、このような断罪は信者を怒らせるかもしれない。そして司教もそれに賛同しないかもしれません。しかし、このような思いはテモテに当てた聖パウロの指令に反することになります。「みことばを宣教せよ。よい折があるうとながるうと繰り返し論じ、反駁し、とがめ、すべての知識と寛容をもって勧めよ。」(テモテオへの第二の手紙 四：2)。

時が良くても悪くても勧める、とは聞く人の気に入ろうがいないまいが神の教えを伝えることです。そのような説教をする司祭は会衆の気には入らないかもしれないが、だからといって自分の義務を果たすことから免除されるわけではありません。マザー・テレサが言ったように「神がわたしに要求するのは成功することではなく、忠実であることです」。

司牧者の義務を果たすときキリストに對して忠実であることは、聖アウグスティヌスによる良い牧者の例え話の解説によるともつとも大事なことです。狼はキリストに属する群を襲っています。世界的規模の宣伝のせいで、カトリッ

ク信者の大部分は避妊しています。狼に抵抗する代わりに、多くの羊飼いたちは狼が襲いかかるのを放置します。また他の羊飼いたちは恐れに麻痺して警戒信号を発しようとしません。わたしたちはキリストの教えが大事でないから黙っているのでしょうか？

一九六八年は『フマネ・ヴィテ』のような回勅を出す時期として、最悪であったかもしれませんが。死の文化の先駆者であった放縱の文化は当時力を付けつつありました。時はまさにこの文化「自慢の「性革命」のまっただ中でした。しかし、今でこそ多くの人たちが悔やんでいることですが、その実状は性に関する途方もない逆行現象に他なりませんでした。このような理由で、一九六八年は『フマネ・ヴィテ』にとつては最良の年であったかもしれません。たとえ全ての時期が真理を受け入れなくても、真理にとつて全ての時期はいい時期です。一九六〇年代には「預言的」声明がはりました。しかし、回勅『フマネ・ヴィテ』のように永遠の価値がある預言がどれほどあったでしょうか？

リチャード・ノイハウス
Religion and Public Life 総裁

回勅 『フマネ・ヴィテ』 についての一考

一九六八年は『フマネ・ヴィテ』のような回勅を出す時期として、最悪であったかもしれませんが。死の文化の先駆者であった放縱の文化は当時力を付けつつありました。時はまさにこの文化「自慢の「性革命」のまっただ中でした。しかし、今でこそ多くの人たちが悔やんでいることですが、その実状は性に関する途方もない逆行現象に他なりませんでした。このような理由で、一九六八年は『フマネ・ヴィテ』にとつては最良の年であったかもしれません。たとえ全ての時期が真理を受け入れなくても、真理にとつて全ての時期はいい時期です。一九六〇年代には「預言的」声明がはりました。しかし、回勅『フマネ・ヴィテ』のように永遠の価値がある預言がどれほどあったでしょうか？

ジエームス・バックリー、F.S.P.

回勅

「フマネマ・ヴィエテ」考察

ほとんどの人たちは教皇の回勅は難しくて読めないと思っ
ています。回勅はあまりにも物
かりが悪く、時代の要求に対し
て鈍感であると思像します。し
かし、実際はどうでしょうか？
ほとんどの回勅は神学者のため
に書かれたものではありません。
そうではなく、全てのキリスト
信者が読んで、分かるための指
導の手紙として意図されています。

回勅『フマネ・ヴィエテ』で、教
皇パウロ六世はわたしたちに明
瞭で、説得力があり、論理的で、
簡潔な司牧的指導をなさってい

ます。高校卒程度の学歴があれ
ばこの短い文書をだれでも読む
ことができます。

ですから、特にどれほど多く
の人たちが公然とその拒絶を望
んだことを考慮に入れると、カ
トリック信者でこの文書を読ん
だ人の少ないことには驚きを禁
じ得ません。

ひたすら議論のためだけに、
カトリック教会の道徳に関する
教えに従うのはカトリック信者
の義務であるという問題にはし
ばらく目をつぶりましょう。そ
れでも、カトリック信者の男女
は産児制限に関する教会の教え
を拒絶する前に、少なくとも教
皇様方の文書を読むだけの礼儀
正しさが無いのはなぜでしょう。
同様に、カトリック信者が家
族を計画するために（しばしば
中絶促進作用もあり得る）避妊
を「しなればならない」という
「実践的」選択をする前に、自分
たちの教会が勧めている自然な
家族計画（NFP）の講習会に出
席する最低の礼儀を期待するの
は無理というものでしょうか？

教導職が許している唯一の自
然な家族計画をカトリック信者
が試すことすらしないで、拒絶
することは道徳的に正しいとい
るか、論理的でさえありません。

その代わりに、ほとんどのカ
トリック信者とカトリックでな
いキリスト信者は、産児制限を
売り物にする企業が日夜を問わ
ずNFPを否定し、そしる広告と
か宣伝に耳を貸し、彼らにいと
も簡単に騙されてしまいます。

いいニュースは人工避妊の費
用、危険、不便さ、失敗がますま
す明らかになりつつあることで
しょう。ですから、いつか自然な
家族計画が社会的にも受諾され
る日がくるのは確かです。その
時点で、回勅『フマネ・ヴィエテ』
の預言的価値がついに認められ、
人々は自然法の知恵をもっとよ
く評価し始めるのでしよう。

デイヴィッド・リアドン

(The Elliot Institute for Social
Sciences Research 所長)



1)それは、過去19世紀にわたっ
てカトリック教会が伝統的に教え
てきた、既婚者同士の愛について
のよい知らせは、優れたものであ
り、全ての人がそれについて知る
べきである、わたしたち
が考えるからです。60年代
から70代初期にかけての何
年かの期間、人類は人工避
妊の罫に落ち込んでいまし
た。わたしたちの25年にわ
たる結婚生活を振り返って、
この期間が決して幸福なも
のであったとは思いません。

70年代初めの頃、わたした
ちは幸いなことに人工避妊
は間違っているという教会
の変わらぬ教えについて司
祭が説教台に上って話すの
を耳にしたものでした。あ
のような説教はわたしたち
に影響を与え、わたしたち
が自然に基づいた家族計画
(NFP)を使用するきつ
かになったものです。

2)それは、受胎能力は
解決しなければならぬ問
題であるどころか、わたし
たちが理解し、大事にしな
ければならない神からの賜
物である、わたしたちが
考えるからです。わたしたちの創
造主が、わたしたちを男と女に創
造なさったことについて考えれば
考えるほど、わたしはすばらしく
造られている」と歌いあげた詩篇
作家とともにわたしたちは喜びま

NFP なぜよいと考えるのか

す。わたしたちは女性、または男性
であることの尊厳を大事にします。
自然法は以前にまして、意味深い
ものになります。

3)それは、わたしたちがNFP
を教えてきた多くの夫婦が示す反
応によると、NFPが、自分
たちの結婚に害があるどこ
るか、非常に健康なもので
あったからです。定期的禁
欲の結果として、自分たち
が、不幸の預言者たちが予
言したがるように、夫婦仲
が悪くなるどころか、互い
がもっと緊密に結ばれたと
感じることを、多くの夫婦
が報告してくれました。

NFPを実践しているあ
る人が、昨年のクリスマス
は、自分たちにとって、久し
ぶりに、非常に特別なもの
であったことを報告してく
れました。なぜでしょうか。
自分たちの生活にロマン
がよみがえったから、自分
たちの意志疎通が劇的に改
善されたからだと言っ
ます。

別の夫婦は、パートナー
が、カトリックへの改宗を
決心したことを報告してく
れました。それは、まさに非常
不安定な妊娠期間の禁欲と、その子
の出産に引き続いた自発的禁欲期
間の出来事だったので。

またピルを使用していて、何年
か前は、別居寸前の状態にあっ

ある夫婦の例もあります。妻の母親の薦めで、彼らはわたしたちの講習会に参加しました。彼らは、後に別の小教区に引越しましたが、そこでは模範的な仲のいい夫婦として知られているとのこと。

4)それは、わたしたちが離婚率について心配しているからです。いろんな調査は二組に一組の夫婦が離婚していることを伝えていきます。わたしたちの限られた経験からだけでも、離婚の結果傷ついた夫婦と子ども達を、あまりにも多く知っています。そして、離婚の後再婚した場合も、夫婦や子ども達が永続的な幸せな家庭を築いたかという点、そのような人たちは極めて少ないのです。NFPを実践している夫婦の離婚率が、わずか1%にも満たないことは、単なる偶然の結果でしょうか。

5)それは、全ての人間の生命が、受胎の瞬間から自然死に到るまで、聖であると信じているからです。そして、何百万という赤ちゃんを死なせてしまう人工妊娠中絶メンタリティーがいけないことであると思うからです。

また、人工妊娠中絶メンタリティーは、人工妊娠中絶メンタリティーに移行していくことも信じています。わたしたちが人工妊娠中絶の頃、カトリック新聞にこんなことが掲載されると、わたしたちは人工妊娠中絶など考えてもいないと言って大笑いしたものです。わたしたちが全く知らなかったことですが、その当時から、ピルには人工妊娠中絶促進剤的な作用があったのです。ピルが排卵を抑制するというふれ込みにもかかわらず、実は排卵があつて、膣粘液が粘度を増したにもかかわらず、精子の移動があり得たからです。また、その結果新しく身ごもられた生命が、ピルのせいで子宮内面が使用いものにならなくなっているのです。避妊リングが受胎を防止するどころか、新しく宿った生命が着床する邪魔をし、極初期の人工妊娠中絶の原因になることを、女性たちに教えるようにした人は誰もいませんでした。

6)それは、詩篇一二七に書いてあるように、「主の贈り物」であると、わたしたちが信じているからです。子ども達は親の所有物でもなければ、経済的な重荷

【プロ・ライフニュース】

[101] 1部ご注文.....無料..... + 郵送料

【カラー・パンフレット】

[201] 生か死..... + 郵送料
 [202] 第二の処女生..... + 郵送料
 [203] デート..... + 郵送料
 [204] どうするの?..... + 郵送料
 [205] "NO"という技術..... + 郵送料
 [206] ティーンの出産コントロール..... + 郵送料
 [207] パージンの瀬戸際..... + 郵送料
 [208] していましたか..... + 郵送料
 [209] 親権限と「10代の性」..... + 郵送料
 [210] 貞節のすすめ..... + 郵送料
 [211] 中絶行為は女性を解放しない..... + 郵送料

【ポケット・サイズ】

[301] 若い生命「1セット=カード+人形」.....30円 + 郵送料
 [303] 国際プロ・ライフ・シンボル・ピン.....200円 + 郵送料
 [304] 国際プロ・ライフ・ネックレス.....500円 + 郵送料
 [305] 胎児の人権宣言カード.....30枚=100円 + 郵送料

【ビデオ+ 本・日本語】

[401] 沈黙の叫び...(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
 [403] ビリングス・メソッド.....(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
 [404] いのちのちーおくりもの.....(VHS).....13000 + 郵送料
 [407] 命美しいもの=one&only.....(VHS).....20000 + 郵送料
 [409] 聞こえる?天使の鼓動.....(VHS).....6000 + 郵送料
 [410] ビル先道国・英国からの警告...(VHS).....15000 + 郵送料
 [500] (本)生命問題に関する...(カトリックの教え).....2987 + 郵送料
 [501] (本)自然な家族計画...(ビリングス・メソッド).....1000 + 郵送料
 [503] (本)プロ・ライフの旅.....300 + 郵送料
 [504] (本)小さな鼓動のメッセージ.....1200 + 郵送料
 [505] (本)いのちをみつめて.....500 + 郵送料
 [506] (本)命あるすべてのものに(マザー・テレサ).....650 + 郵送料
 [507] (本)私の生命を奪わないで.....2300 + 郵送料
 [508] (本)いのちの福音.....1500 + 郵送料
 [509] (本)小さき生命のために.....1300 + 郵送料
 [511] (本)赤ちゃん:最初の十ヶ月...12ページ...100 + 郵送料
 [512]本 日本プロ・ライフ・ムーブメントについて.....300 + 郵送料
 [513]本 カトリック教会と日本プロ・ライフ・ムーブメント.....500 + 郵送料
 [514]本 神様は中絶をどのように言っておられるでしょう.....300 + 郵送料
 [515] (本)経口避妊薬:ピル.....100 + 郵送料
 [516] (本)いのちの福音と教育.....1470 + 郵送料

でもありません。NFPを教えるとき、わたしたちは自然の計画にかなうた方法で子育てに参加できます。つまり、母乳で育てるので、最高の栄養と感情の安定を、子ども達に与えることができます。

7)それは、教皇パウロ六世と教皇ヨハネ・パウロ二世が、回勅『ファミネ・ヴィテ』やファミリアリス・コンソルチオを通じて、教会の変わらぬ教えを再確認させたからです。それは、わたしたちが信仰宣言の中で、「わたしたちは聖霊を信じ、聖なる公会を信じます」と唱えるからです。わたしたちは、真にカトリック信者であろうとするとき、自分たちに気に入った教えだけを信じて、また、気に入らない教えを選んで信じないことができるとは思わないからです。このようなことに関する教会の教えは、わたしたちが賛成したり、反対したりできる性質のものではないと信じます。

8)一九七三年の末頃まで、こういうことに関しての司祭の説教は、わたしたちの生活を劇的に聖なるものに駆り立てたものです。あのころ以来、わたしたちは、たった一回しか、説教台からこのようなことに関する教会の教えを聞いていません。それでも、わたしたちはNFPについて教え続けます。わたしたちは、教会が教えていることを、はっきりと理解できます。ですから、結婚講座にかかわる司祭やカテキスタたちに、自分たちが仕える人々に、結婚した人たちの愛とは何であるかというよい知らせを、勇気を出して伝えるよう、優しく、しかも熱心に、挑戦します。

グインズとサンディー・ニコライ

[511] 赤ちゃん:最初の十ヶ月の旅

[515] 経口避妊薬:ピル

注文: 1 - - - - 5 1部 = ¥1000
 6 - - - - 20 1部 = ¥75
 フルカラー 21 - - - 99 1部 = ¥50
 1000 - - 以上 1部 = ¥35

性教育の材料として、学校、教会、家族、産婦人科

パンフレット申し込は...

1 ~ ~ 5 1部 = 35円
 6 ~ ~ 100 1部 = 25円
 101 ~ ~ 500 1部 = 20円
 500 ~ ~ 以上 1部 = 15円

自由です
 組み合わせは

人生と選択

エリー・ウィーゼルは、その著書「この時代の伝説」の中で、「道徳に基づいた選択をしなればならない時が人生には必ずある、ということをお忘れないうにしよう」と書いています。人生というのは、何が善くて何が悪いのか、何が神から見て許されて何が許されないのか、という道徳に基づいた選択で形作られている。そして聖書によれば、

「死や人の永遠のいのちは、人どちらを選ぶかによって決められる、という。」人々の前で私を否む者を、私もまた天にいます父の前で否む。」(マテオによる福音書 十：33)

私達は皆自分で事を決める

神との関係があるからこそ、私達は皆自分で進む道を選ぶ。ヨシユアがイスラエル人に提示したあの古い選択を私達は今、しななければならない。「もし主に仕えるのをいとうならば今日だれに仕えるかを選べ。」(ヨシユアの書 二十四：15)

つまり、そこでとても大切なのは、私達が賢い選択をするこ

とであり、その心を決めるまでにすべての証拠・根拠を手にすることである。イスラエル人は神に聖約を結ぶことを選択するように言われたが、彼等は何の手がかりもない状態で選ぶわけではなかった。「あなた方は私がエジプトびとにしたことを見た。」と神は彼等に言った、「私が、エジプト人をどう扱ったか、おまえたちをわしの翼に乗せて、私のもとにどうして運んできたかは、おまえたちの見たとおりである。おまえたちが、私の言うことを聞き、契約を守るなら。」(脱出の書 十

九：4-5)イスラエル人は奴隷にされていたエジプトから、神の手によって救い出された。彼等は神の愛と慈悲が自分達に何をして下さったかを目のあたりにし、それを基準に答えたのだった。「われわれは、主が仰せられたとおりにします。」(脱出の書 十九：8) 彼等の選択は、神の行動が根拠となっていた。

だから私達クリスチャンも同じである。イエスが十字架の上で私達に注いで下さった愛を復

活で証明して下さったことがわかっていくからこそ、私達は神に従っていくと決めた。だから私達はその名を取って自分達をクリスチャンと呼び、彼の道に従って歩むことを約束した。私達の選択は神の行動に基づく。

選択するために必要な知識

子どもを中絶するか否かという選択に直面した時、私達は神の行動を問うべきではないだろうか。私達はあまりにもすべての根拠を手にしないまま盲目的に判断を下してしまう。しかし私達は選択しなければならぬ、何故なら「道徳に基づいた選択をしなければならない時が人生には必ずある」からだ。けれどすべての事実は揃っているだろうか？

女性が中絶するかどうかという選択と向き合う時、中絶ということはこの世に一人しか居ない、その子だけのDNA、指紋、遺伝子構造、声、体格や性格を持ったたった唯一の芸術作品を破滅させてしまうことになるということを考えるだろうか？胎児は注意深く、骨と筋で私を織られ「ヨブの書 十：11」精巧に創られている。神により隠れた所で素晴らしく形作られ

た。(詩篇 一三九：15-16)もしその子が殺されてしまったら、もう二度とその子と同じ子どもはできないのである。それを考えたことがあるのだろうか？

神は自分でお創りになった子をわかっていらつしやる

神が素晴らしい芸術作品を創られたのには目的がありになるということにも、気付いているだろうか？神はその子の為の計画をお持ちになつている。神はどんな人だつて何の理由もなしに創られはしない。そうでなければ人間の人生には意味がなくなつてしまう。良い時もあれば悪い時もあり、楽しみもあれば悲しみもあり、勝利もあれば悲劇もある。その中で何故自分は生まれ、やがて消え、忘れられるのか、と考えながら短くはかない人生を過ごすために私達は作られたのではない。神は子ども達一人一人にそれぞれのプランを持つていらつしやる。それを考えたことがあるだろうか？

人間性を選ぶ

例えばどんな状況でできた子どもであつても、小さな子ども達は寄り添い抱きあい、くすくす

笑い大声を上げ、人生の単純な楽しみに喜びを見い出すというのは事実である。確かに子ども達は私達の生活を変えてしまふし、多くの時間と注意を奪われる。でも一度でも子どもを得たら、もう二度と手放したくないと誰でも思う素晴らしい贈り物ではないだろうか？それを考えたことがあるだろうか？

エリー・ウィーゼルは、先に紹介した引用文にこう続けている。「多くの場合、一つの話、一冊の本、又は一人の人間に出会ったことで違う選択をとることが出来る。」彼は言う。「人間性の選択、命の選択。」中絶するかしないか決める時、私達は神を思つて選択するべきではないだろうか？神がして下さったことを考え、神の行動を基に人生を選ぶべきではないだろうか？

エリザベス・アハテマイヤー

逆境にあっても人生を称える

少年のころ、父と古い西部劇の映画を見ていたことがありました。その中で、誰かが埋葬される度に黒衣の牧師が出てきて、墓の傍に集められた人々にこう言い聞かせていました。「なんじはちりなればちりに帰るべきなり。」そしてあのすばらしい祈りを吟唱しました。

「神は与えられ、神は奪われる。神の名をほめたたえよ。」

その時、その祈りを苦しみの時のための祈りだと思っただのを今でも覚えています。

月日は流れ、一九八一年の二月二十六日、父は病院の集中治療室で心臓麻痺を起こしていました。蘇生処置を受けている間、脳に十分な酸素を供給されなかつたため、父は昏睡状態に陥りました。

それが、父と私達家族の苦しみの始まりでした。その苦しみが大きくなったのは、決して治療のせいではなく、医学を職業とする死の愛好家達の冷酷さのせいでした。

しかし、苦しい時は同時に英雄的な時でもあり、父は私達が幼い時から、雄々しくあるためには選択ではなく、挑戦するのだと言い聞かせていました。

昏睡状態に陥った父と私達家族との家での生活が、苦痛だけだったというわけではありません。それは、神から父に、そして父から私達に与えられたすばらしい貴重な時間でした。父は、昏睡状態とされる状況にあっても愛する妻のマデリンにキスをすることができました。苦しい状況にあつて、二人の愛情は一層強いもの

になっていました。

父は、ナンシー・ベス・クルーザンら昏睡状態にある人々の仲間入りをしました。飢餓の迫るナンシーに悲しみを感じて、私はあるレポーターに、神が我々に与えて下さった愛は、我々が神に捧げる愛よりはるかに大きいのだと話しました。

レポーターは、「神はどうやってその愛を与えられたのですか?」と聞きましました。「単に生きることです」と、私は答えました。

「昏睡状態の父の命の一日一日が、献身的な愛の贈り物なのです。」それは、ナンシーが墓に捨てられなければ与え続けることのできた贈り物でもあります。

「私とともに一時間ほど寝ずの看護をしてもらえますか」と、イエス様が言わ

れます。私達は時にストツプウォッチを取り出したくなる時もあります。

一方、クルーザンは犠牲者でしたが、父は片時も持ち場を離れない忠実な戦士でした。彼はかつて、国の召集に応じてヒトラーとその集団虐殺に対抗する戦争に参加しました。そして、今度神の招きにに応じてヒトラーの哲学的・倫理的継承者 安楽死連合 に立ち向かい、戦いました。

一九九〇年九月二十三日、神はこうおっしゃって父を召されました。「よろしい、信仰あつた僕よ、おまえは忠実だったので多くのものを与えよう。私の用意した喜びを受け取るがよい。」

アール・アップルバイ